『中央評論』253 号、中央大学出版、2005 年所収

多摩哲学会への誘い

土橋　茂樹

関係者の間では、いつの間にか親しみをこめて「多摩哲」と呼ばれるようになった「多摩哲学会」も、早いもので発足から二年目の秋を迎えようとしています。今回、「多摩に生きる」という特集が本誌で編まれるにあたり、多摩の地に根ざした先達たちには遠く及ばぬものの、多摩地域のヒューマン・ネットワークを基盤にして始まったばかりの私たちのささやかな活動の一端も、「多摩」特集に便乗して少しばかり紹介させていただこう、というのが小論のいささか図々しい目論見です。

そもそも多摩哲とは何か？

多摩地域に隣接する多くの大学に所属し、広く哲学的な関心を共有する教員・院生有志たちが、腹蔵なく議論を交わしあえる公共的な場を持ちたい、という積年の思いを具体化したのが本会です。とはいえ、「多摩」という地域の限定は決して排他的なものではありません。むしろ、多摩という辺境から日本全国、否、世界（！）に新しい哲学の息吹を発信していこうというグローバルな青い野望と、〈たま〉に会って哲学の話をするという肩肘張らず、しかも歓待の精神に満ち溢れた村の寄り合い的ローカリティ、その両者を融合させるべく、一つのシンボルとして掲げられたもの、それがたまたま「多摩」だったというわけです。

実際、多摩地域には多くの大学が軒を並べていたにもかかわらず、それら相互の横の繋がりは哲学分野に関する限り、特定の専門領域内での個人的な関係を除けば、ほぼ皆無といってもよいほどでした。とりわけ筆者が中央大学に赴任してきた数年前には、そのあまりの閉塞状況に、思わず「陸の孤島」という噂は嘘ではなかった、と思ったほど。しかし、案ずるには及びませんでした。上述のような筆者のいささか誇大妄想じみたアピールに賛同してくださる方々が次々に現れ、なかば冗談のように語っていた「多摩哲」が、瞬く間に現実のものとして動き始めたのですから。

当初は、中央大、都立大（当時の首都大）、一橋大、明星大（五十音順）の哲学系教員・院生有志が一応の発起人として会の仕組みをあれこれ考え、その後おおよそ以下のような基本活動方針が掲げられることになりました。

すなわち、本会の基本的な活動方針は、

１．自分たちが、今、一番話を聞きたいと思っている研究者を招いて、講演や質疑を中心に濃密な研究交流を図る。

２．今はマイナーな領域であまりよく知られていないが、実は極めて活性的でこれからどんどん面白くなるであろう分野において、開拓的活動をしておられる研究者を招き、その現状と将来的展望を語ってもらう機会を設ける。

３．大学院生やオーバードクター、非常勤職の若手研究者に、発表・質疑併せて 60〜90 分程の持ち時間をとって存分に発表できる機会を提供する。

４．上記のような活動が、特定の専門領域に偏ることなく、たえず哲学史的な見通しのよさと現代的な状況全般への過不足ない目配りを背景としてなされるよう、日頃から時代区分・専門・分野の異なる多様な研究者と研究交流できる研究会等の機会を設けていく。具体的には、年一回の研究発表のための大会を開催し、さらに必要に応じ、講演会やシンポジウムを年次大会に組み入れる、あるいは独立して開催する。そして、その成果を年一回、会誌に収め刊行する。

要するに、できるだけゆったりと、やりたいことを存分に楽しみながら、互いに学び合うことのできる、きわめて緩やかでオープンな哲学的な語らいの場、それが多摩哲なのです。

具体的な活動内容は？

では、実際に多摩哲がどんな活動をこの一年半の間に行ってきたのか、その内容をご紹介したいと思います。まず 2004 年度は、発会の年ということもあり、例外的に 7 月と 11 月に第一回・第二回大会が開催され、さらに本年 10 月には第三回大会が開催されました。そのプログラムをご覧になれば、多摩哲の関心領域の広さをすぐにご理解いただけるものと思います（なお、各発表者の敬称は略させていただきます)。

第一回大会（2004 年 7 月 4 日）

・金澤　修（東京学芸大学）
　プロティノスにおける「不文の教説」解釈の位置について
　　－数の成立の場面を巡っての試論

・柳澤　田実（東京大学）
　〈愛〉と〈語り〉－教父ニュッサのグレゴリオスを中心に

・土橋　茂樹（中央大学）
　倫理と信仰の閾
　　－キルケゴール『恐れとおののき』を解釈するための東方教父学的序説

・村井　則夫（明星大学）
　無限性と有限性のあいだで
　　―ブルーメンベルクのクザーヌス、ブルーノ解釈をめぐって

第二回大会（2004 年 11 月 28 日）

・斎藤　元紀（法政大学）
　弁論術と解釈学

―ハイデガーのアリストテレス『弁論術』解釈の射程と制約

・高橋　英海（中央大学）

思想史におけるシリア語文献の意義

―バルヘブラエウスにおける世界の永遠性の論議を例に

・矢野　善郎（中央大学）

マックス・ヴェーバーの方法論的合理主義

第三回大会（2005 年 10 月 2 日）

・山本　芳久（千葉大学）

ヤフヤー・イブン・アディー『道徳の革新』における魂の三部分説と「道徳的性質（ahlaq）」の可塑性について

・山口　一郎（東洋大学）

存在から生成へ－フッサール発生的現象学研究

・中井　章子（青山学院大学）

ノヴァーリスと自然神秘思想－自然学から詩学へ

（なお、本稿執筆時は、第三回大会開催の２ヶ月近く前であり、発表題目はすべてその時点での仮題的なものであることをお断りしておきます。）

いずれの発表者も 90 分の持ち時間が与えられており、その内 50 分から 1 時間を発表にあて、残りを参加者との質疑応答に費やすことができます。これだけ時間的余裕があると、発表者にとっても、聴講者にとっても十分な手応えがあります。その上、時代も専門領域も異なる幾分マニアックで、ある意味「濃い」発表を日に三つも四つも聴講できるわけですから、本当にいい勉強になります。おかげでどっと頭は疲れますが、その分、打ち上げのビールの味は格別です。なにより、自分にとって未知であった分野の専門の方々のお話を詳しくうかがうことができる機会は、とても貴重です。

多摩哲の理念

理念というほど大げさなものではありませんが、これからも決して手放したくない多摩哲の基本思想があります。それは、自らの専門領域に自閉することなく、かといって表面的で浅薄な似非学問に満足することもなく、むしろ人知れず営々と築き上げられてきた専門的な研究成果の数々に素直に驚き、もっぱらそれのみを深く喜び味わうことのできる開かれた愛智の構えをもち続けること、と言えるでしょうか。このことはなにも哲学に限ったことではないと思いますが、各自が自身の持ち場でなすべきことをコツコツと積み重ねていくという垂直方向に孤立した局面と、他方、自分とは異なる持ち場でなされてきた仕事の成果をあくまでも素人として驚き喜ぶという水平方向に共感していく局面とを、違和なく融和させ立体的な知の空間を創出していけるようなバランス感覚こそが、今とりわけ

求められているのだと思います。

「アマチュア」という言葉がラテン語の「愛する人（amator)」に由来し、「哲学（フィロソフィー)」がギリシア語の「智慧（ソフィア）への愛（フィリア)」に基づくことはよく知られていますが、あくまでも一介の素人として専門知の織り成す異次元へと踏み込む冒険心の源は、やはり未知なるものへの素朴な好奇心・愛好心なのだと思います。ですから多摩哲では、自分の専門領域の話だけ聞いたら、後はさっさと帰る、というようなことはきっぱりお断りしています。そういった偏狭な学問的縄張り意識からは生まれてこない豊饒な知の地平が、まったく未知の分野から拓かれてくるときの喜びといったらありません。

多摩哲には実に種々多様な領域の専門家たちが集まって来てくださいますが、自分の専門領域以外では所詮みな素人なのですから、考えてみればほとんどの聴衆があくまで素人としてきわめて専門的な話に耳を傾けていることになります。既存の大きな学会とは異なるこうした多摩哲の特質を今後も大切にしていきたいと思っています。

多摩哲の今後

では多摩哲の今後の課題は、何でしょうか。それはやはり多摩哲が「いかにして多摩に根付くか」ということではないかと思います。確かに本会で中心的に活動してくださっているのは、多摩地域の大学関係者ではあるのですが、しかしその一方で、お招きするゲストスピーカーや毎回積極的に参加してくださる方たちの中には、多摩とは無縁の方たちも結構たくさんいらっしゃいます。そうした方たちが集まり易いようにと、大会の会場も中大の後楽園キャンパスや駿河台記念館を利用しています。そういった意味では、「多摩」にはまだあくまでシンボリックな意味しか込められていません。

しかし、年に一度の大会が非日常的な知の祝祭だとすれば、同時に私たちが日々、多摩において地道に積み重ねている教育活動に「多摩哲」精神を注ぎ込むことはできないのでしょうか。もし、多摩哲の基本精神が、哲学のいわば業界人として有益な情報の交換のみを目指すのではなく、むしろ哲学のアマチュアとして自らの不知と知の狭間を往来すること自体を愉しもうとすることのうちにあるのだとすれば、その精神を実現できる可能性は、実は私たちが日々、各々の大学で行っている教育活動を、いかにして地元の（つまり多摩地域の）市民の皆さんの好奇心・知を愛する心へと繋げていけるか、その一点にかかってくるのではないかと思います。

もちろん拙速に事を進める必要はありません。お互いができる範囲で少しずつ何かを変えていくことで、やがて大きな変化も生まれるものです。もし、この記事を読まれて多摩哲に興味を持たれた方がいらっしゃったなら、まずは多摩哲の会誌『パレーシア』創刊号を手にとって気になる頁から読み始めてください。その上で、ちょうど「パレーシア」という名がギリシア語で「腹蔵なく語る自由」を意味するように、皆さんも私たち多摩哲の活動に対して、どんどんご意見・ご要望をお寄せください。そうやって十年もたてば、きっと多摩哲は多摩に根付いた市民による市民のための哲学の場へと変容しつつあると思い

ます。そうすれば、多摩から世界に向けて哲学的なメッセージを発信するという夢も、まんざら法螺話では終わらないような気がします（もちろん、法螺話で終わっても、それはそれで多摩哲らしくて面白いのですが……）。いずれにせよ、多摩哲はこれからも多摩哲らしく頑張りますので、皆さんもどうか応援のほど、よろしくお願い致します。